

[概要]

本研究では、修学旅行に参加する学生の出身地や社会的な背景といった地理的・社会的属性の違いが、修学旅行体験に対して持つ意味の差異を検討し、修学旅行の教育効果について明らかにすることを目的とする。戦前期の「修学旅行日記」を扱った先行研究は、日本本土内/外における地理的・社会的属性の違いによって修学旅行の経験・需要が異なり、教育効果に差異が見られると論じる。しかし、日本本土内部の地理的・社会的属性の違いに着目した議論はされず、等閑視されてきた。そのため、日本本土内部の地理的・社会的属性として「農村」部に住む「女性」を取り上げ、高岡高等女学校を事例に挙げて分析を行った。

戦前期の富山県の高等女学校の修学旅行は、天皇制イデオロギー教育や敬神崇拜の思想を広める目的と地理や歴史科目の教養を深める目的をもって実施されていた。記述の分析をすると、国民国家的な教育的効果が見られる一方で、地元を俯瞰してみることができるといえる。さらに、一部の女子生徒にとっては、女性としての在り方について考えるきっかけになっていた。

以上のことより、修学旅行に参加する学生の「都市/農村」「女性」という地理的・社会的属性に着目したとき、修学旅行の教育効果は、学校が設ける修学旅行の実施目的から外れた教育効果がみられたといえる。今後の修学旅行の研究では、地理的・社会的属性の違いによって修学旅行の受容と教育的意義がどのように変化するのか、という、参加する学生個人の背景にまで焦点を当てたミクロな議論をしていく必要がある。

キーワード:高岡市, 高等女学校, 修学旅行